

平氏と大宰府

平氏は鎌倉幕府に先だち、武家として初めて政権を掌握したと言われる。平氏政権について、特別な政治制度を打ち立てたのではないとする説もありますが、一方で、日宋貿易を早くから重視するなど、開明性を持ち合わせていました。

そもそも平氏と九州とのつながり

は、平清盛の祖父正盛が、元永2年（1119年）、肥前国藤津荘荘官平直澄の討伐を行ったことから始まります。

源氏が東国を基盤としたのに対して、平氏は、軍事的・経済的基盤を西国に置くようになるのです。また、清盛の父忠盛は、長承2年（1133年）頃、肥前国神崎荘で日宋貿易に関与していたことを示す史料が残っています。忠盛は、神崎荘の荘官としての立場を利用し、私貿易を行っていたようです。

さて、その後、清盛およびその弟頼盛は、「大宰大貳」という官職に就任しています。特に、頼盛が大貳として大宰府現地まで赴任してきたことは、非常に重要です。当時の地方官は、遙任といって、任命されても現地に赴任しないことが一般的でした。実際、保安年間（1120）2

大宰府人物志

資料室だより 66

4年）に赴任した権帥源重資以後、大宰府には権帥・大貳（ともに実質上の大宰府長官）とも現地まで下向した人物はいません。この頼盛の大宰府下向は、大宰府現地を掌握することで、日宋貿易を有利に進めようとしたものと解釈されています。

「この一門（平家）にあらざらん人はみな人非人なるべし」とまで言われた平氏政権ですが、治承5年（1181年）の清盛の死後は徐々に勢力が衰え、寿永2年（1183年）には、源頼朝の従兄弟にあたる木曾義仲の入京を前に、都落ちを余儀なくされます。その際、平氏は安徳天皇を奉じ大宰府までやって来ました。平氏の拠点たる大宰府で再起をかけたように思われます。『平家物語』によりますと、安楽寺（大宰府天満宮）で和歌や連歌を詠みながら、都を思い出し涙したとあります。このように、平氏と大宰府とは非常に深く関係していましたので、平氏が滅亡した後、鎌倉幕府は特に九州支配を重視することになります。